



筑紫女学園大学リポジト

無助詞のカテゴリー分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-03-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1097

無助詞のカテゴリー分析

緒 方 隆 文

A Categorical Approach to Zero Particles

Takafumi OGATA

1. はじめに

本稿は無助詞で、カテゴリー分析を行う。カテゴリー分析とは、表現が持つ意味をカテゴリー(ラベルと成員)の関係で示し、カテゴリースキーマを通して、その特性を明らかにするものになる。ここでの主張は4つある。一つは無助詞は2種類、特有の意味を持つゼロ助詞と、助詞の省略があるとする*1。ただしこの2つは連続しており、(呼びかけ)(ゼロ助詞)(助詞の省略)(助詞付き表現)という連続線上の中に配置されるとする。無助詞以外の表現と比較することで、他表現との連続性や差違が明らかになると考える。助詞付き表現は、緒方(2021)で述べた助詞のハヤガとの比較を中心に述べていく。なお以下、ゼロ助詞が付加する名詞句を「ゼロ助詞句」、単に助詞が省略された名詞を「省略句」と呼んでいく。

二つめに、無助詞はハヤガと異なり、叙述部分と直接的関係づけ(連結)がないとする。つまり無助詞句とそれ以外の部分は、切り離された形になっていると主張する。この切り離しにより、副次的な効果が生じる。この切り離し感は、ゼロ助詞と助詞の省略では異なる。ゼロ助詞では切り離し感が強いが、助詞の省略の場合、切り離し感が弱く、連結の軌跡が含意されるとする。切り離されてはいるが、無助詞句とそれ以外の部分は関連付いている。こうした関連を同一指標で示すとともに、前景化され言語化される部分を太字によって表記していく。

三つめにゼロ助詞句、省略句は、単体として現れると述べる。ハヤガでは、付加する名詞句(以下、ハ/ガ名詞句)は、カテゴリーの中で位置づけられる。緒方(2021)で、ハ/ガ名詞句はカテゴリー(α)の成員と見なした。それにより、排他や対比の意味が説明された。しかし無助詞句の場合、カテゴリーの含意がなく、単体として現れるとする。そのため排他や対比の意味がないと述べる。

四つめに、単体の扱いだが、出現と出現でない場合があるとする。ゼロ助詞句の場合は、出現と考える。文頭近くで、話題提起のため単体で出現する。突如出現するかたちをとるため、聞き手がすぐ特定できる身近なものだけという制約が課せられる。一方助詞の省略では、動詞のすぐ近くで係ったりするなど、構文的な理由も伴い、ゼロ助詞のような制約はない。構文としての関係が、より見えやすくなっている。上記4点で見た違いや特性を示すために、本稿ではカテゴリースキーマを用いる。カテゴリースキーマがより端的に、正しく表記できると考えるからである。

以下の構成は、2節で無助詞表現での連続性、3節で無助詞句が単体であること、4節で出現に

おける条件、5節で切り離しと直接連結について見ていくこととする。

2. 無助詞表現での連続性

ここでは無助詞表現と、他表現との連続性を考察する。無助詞とは、助詞が入りうるところに、助詞が現れない形で、(1)に示すように位置も用法も多岐にわたる(φは無助詞部分)*2。

- (1) a. 雨が降っている。/ 雨φ降ってる。 b. 私は知っています。/ 私φ知ってます。
 c. 面白いね / 面白いφ。
 d. 帰ってきた時に、何か言っていた? / 帰ってきた時φ、何か言ってた?

(丹羽哲也 2014: 602)

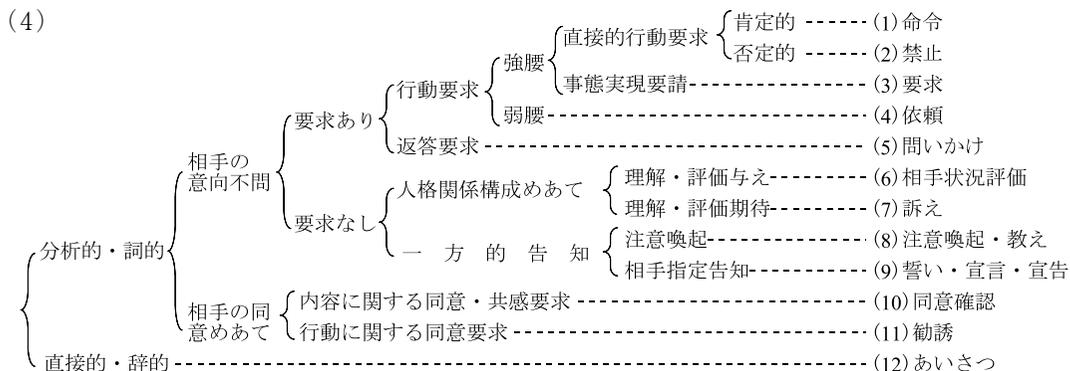
本稿は考察対象を、(1a,b)のような名詞句(相当語句)に助詞が付きうる無助詞表現とする。無助詞では、対応する格助詞が特定できるものやできないもの、無助詞の代わりに格助詞が使えるものや使えないものなど特性に違いがある。意味においても、助詞がついてもつかなくても、ほとんど意味が変わらないものもあれば、意味が全く変わるか、助詞が入ると不自然になるものもある。

つまり無助詞と一言でいっても、その中身は違う。これまでの研究では、無助詞表現を単なる助詞の省略とみるか、特別な意味を持つゼロ助詞と見るか、あるいはその両方の用法があるかで議論されてきた。本稿では、助詞の省略とゼロ助詞の2種類があると考ええる。

根拠の一つに意味の違いがある。ゼロ助詞の場合、助詞を入れたら意味が変わったり不自然になる。(2)では、φの代わりに、ハヤガが入ると意味が変わる。ゼロ助詞は、独自の特性あるいは意味を持つと考えられる。一方助詞の省略と思われるものは、助詞を入れても、入れなくても意味に大きな違いが生じない。(3)ではヲヤガをいれたものと、ほぼ意味が変わらない。

- (2) a. 彼φ/ハ/ガ、パーティに来るよ。 b. あなたφ/ハ/ガ、このプレミアム商品を購入しますか。
 (3) a. 新聞φ/ヲ 読んだら、ちょうだいね。 b. 時計φ/ガ 止まってたから、遅刻した。

また現れる位置にも違いがある。ゼロ助詞はもっぱら文頭、または文頭近くに現れるが、助詞の省略は、文頭に限らず、従属節の中など、どこにでも現れうる。これは生起位置が、意味に影響を及ぼすことを示している。加えて、無助詞句と無助詞句以外の部分との切り離し感も異なる。ゼロ助詞では切り離し感が大きく、助詞の省略では小さい。これに伴い副次的な効果も異なってくる。



両者は一つのものとして分析するには、違いが大きい。そのため2つに分ける。しかしゼロ助詞と助詞の省略は、明確に区別されるものではなく、一連の変化の中で段階的に移行すると考える。

まずゼロ助詞から見る。ゼロ助詞は、ゼロ助詞以外の部分との切り離された感が強い。この強い切り離し感は、呼びかけ表現からの流れがある。呼びかけは、(4)に示すように様々な用法がある(尾上(1975: 78)「言表の対他的意志の分類」)。(4)の用法は、ゼロ助詞と共通するものも多い。なお呼びかけ部分は、必ずしも文頭にくるとは限らない。(4)の番号と対応する例を、(5)に示す。

- (5) 1. おーい中村君 ちょいとまちたまえ。 7. おかあさん、おなかが痛いよウ。
 2. 愛しの妻よ泣くじゃない。 8. 太郎ちゃん、水たまりよ!
 3. おうい、みよ子、お茶。 9. 先生、きつとやります。
 4. 大山さん、行かないでください。 10. 大山君、寒いね。
 5. 大山さん、あしたも行く? 11. 大山さん、一緒に飲みませんか。
 6. 父よあなたは強かった。 12. 大山君、おめでとう。(尾上 1975: 72-77)

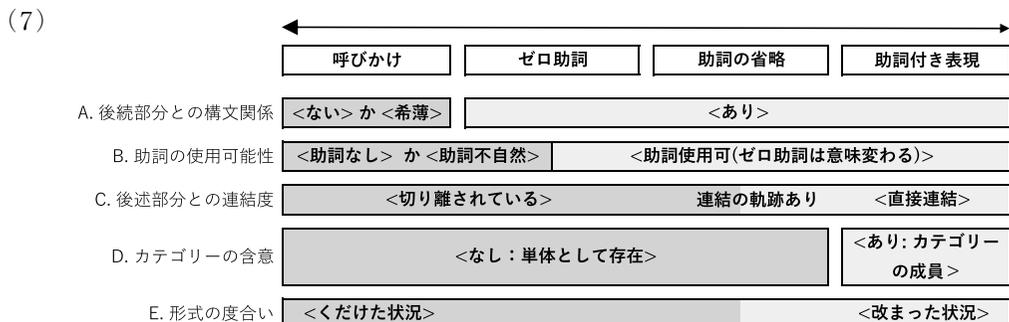
ゼロ助詞では、相手に対して働きかけることが多いため、呼びかけ表現の行動要求、返答要求あたりと重なりが大きい*3。そこに連続性を見いだすことができる。ただ呼びかけでは、呼びかけ部分とそれ以外の部分の関係が、ゼロ助詞よりも希薄である。理由は、格関係を持った構文としてのまとまりがないからと考えられる*4。

とはいえ呼びかけ表現でも、呼びかけ以外の部分と構文関係があるように見える例も多く見られる。しかしゼロ助詞と異なり、そう見れば見るだけで、構文関係としてのまとまりは希薄である。

- (6) a. 先生、お客様がお見えになりました。 b. 先生、お手紙が届いています。
 c. 兄さん、今帰ったの? d. 姉ちゃん、ちょっと疲れてんじゃない?
 e. それは君、違うんじゃないの? (山田・中川 1996: 85)

一方ゼロ助詞の場合、助詞を入れると不自然な場合もあるが、対応する助詞が基本存在する。その助詞を通して、ゼロ助詞以外の部分との格関係が分かる。つまりゼロ助詞と、それ以外の部分は、呼びかけ表現よりも、構文としてのまとまりがある。このように考えると、呼びかけ表現とゼロ助詞は、ゆるやかに共有するものを持ち、連続性を持っていることが分かる。

そのため呼びかけとゼロ助詞もいわば連続する線上にあると考えられる。一方助詞の省略は、助詞付き表現側にある。意味が変わらないし、ゼロ助詞ほど切り離し感もない。これらの表現を線上に並べたものが、(7)になる。なお(7)では、表現名の下に特性の違いが5つ併記されている。



併記した5つの特性を見る。まずA. 後続部分との構文関係は、呼びかけでは、ないか希薄である。構文としての緊密度は薄い。一方ゼロ助詞、助詞の省略、助詞付き表現では、構文関係が成立している。次にB. 助詞の使用可能性だが、呼びかけにはもともと助詞が入る余地はない。ゼロ助詞では、助詞が入ると不自然な場合と、助詞を入れると意味が変わるものがある。そのため助詞の使用可能性で言えば、呼びかけと助詞の省略・助詞付き表現の両方の特性を持ち合わせている。表ではゼロ助詞を真ん中で二分する形で示している。一方助詞の省略では、意味を変えずに助詞付き表現に置き換えることができる。そのため助詞使用可としている。C. 後述部分との連結は、Aと似ているが、構文とは関係なく、切り離されている感があるかどうかになる。切り離しの反対が、直接連結になる。ここは連続して推移する。呼びかけと似て、ゼロ助詞は、それ以外の部分からの切り離され感が強い。助詞の省略では、助詞がないために切り離し感はあるが弱く、直接連結の軌跡がうっすらと感じられる。つまり直接連結していないが、その軌跡の含意がある。そのため表では、切り離し感と直接連結の連続させる形で位置づけている。さらにD. カテゴリーの含意では、助詞付き表現は主としてハとガを想定している。ハとガでは、付加する名詞句は、カテゴリーの成員と見なした(緒方 2021)。カテゴリーを想定することで、対比や排他の意味が説明されるとした。一方呼びかけ・ゼロ助詞・助詞の省略では、各々の句は単体として生じる。つまりカテゴリーの含意がない。そのことが意味の違いにつながっていると考える。最後にE. 形式の度合いであるが、これは単なる傾向であって、必ずそうになっているわけではない。呼びかけや無助詞表現は改まった場面ではあまり用いられないことを示している。その連続線上に、助詞の省略がある。

以上をふまえ無助詞を考えると、ゼロ助詞と助詞の省略の共通点は、A. 無助詞句とそれ以外の部分で構文関係があり、C. 無助詞句とそれ以外で切り離し感があり、D. 無助詞句が単体であることにある。相違点としては、B 助詞の使用可能性と意味の変容に違いがあり、C. 直接連結の含意の有無で違いがある。以下これらをカテゴリースキーマで見ていく。

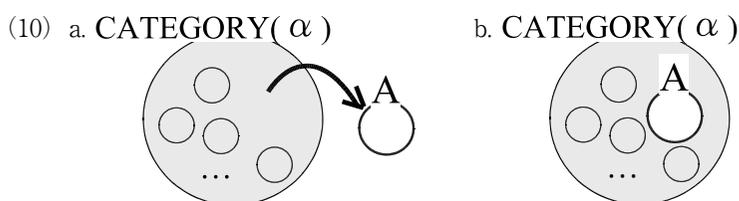
3. 単体としてのゼロ助詞句、省略句

本節以降、カテゴリースキーマを導入しながら、論を進めていくことにする。まず名詞句が単体なのか、カテゴリーの成員なのかを判断するために、ハやガと比較する。ハとガの分析は、緒方(2021)で行った。そこではハとガが付加する名詞句(以下、ハ/ガ名詞句)は、カテゴリーの成員であるとした。ハ/ガ名詞句はカテゴリー内の成員であることから、カテゴリーの他成員との比較が生じる。これによりハでは対比の意味が生じ、ガでは排他的意味が生じる。文例を(8)(9)に示す。

(8) a. 私は反対です。 b. 彼は行きません。 c. しいたけは、食べられません。

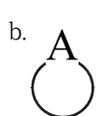
(9) a. 彼が責任をとります。 b. 佐藤がリーダーです。 c. 吉岡が学生です。

つまりハとガでは、他成員を背景化したときの意味が異なる。ハでは対比、ガでは排他的意味になる。これは各々のスキーマ



マに起因すると考えられる。緒方(2021)では、(10)のスキーマを提示した。(10a)がハ名詞句で、(10b)がガ名詞句のスキーマになる。

(10a)では、ハ名詞句(A)が、カテゴリー内から、外に取り出されている。外に取り出されることで、他成員と距離が離れ、独立した存在となる。そのため他成員を背景化したとき、対比の意味となる。独立した存在となることから、主題Aが、文を超えて、複数のもと関連づけられることも可能となる。文を超えて主題が維持される。一方(10b)では、ガが付加する名詞句(A)はカテゴリー内にとどまる。そのため他成員を背景化するとき、排他的意味となる。同じカテゴリー内の背景化になるからである。ガ名詞句(A)は、文を超えて関連づけられることはない。

ハ/ガ名詞句に比べ、無助詞では、そうした対比や排他的含意が一切ない。これはとりもなおさず、カテゴリーを前提としておらず、他成員が含意されないからと考えられる。つまりカテゴリーの成員ではなく、単体と考えられる(○で表記)。単体は、(11a)のように出現の形をとるか(破線矢印で表記)、(11b)のように出現の含意がないものの2種類がある。先回りして言えば、ゼロ助詞の場合、出所不明の出現の意味(11a)になる。助詞の省略の場合は、出現の含意はなく、単体として存在する((11b))。この出現か、出現でないかについては、(11) a.  b. 

4. 出現における条件

3節で無助詞句は、単体と述べた。この単体が(11a)のように出現するのか、それとも(11b)のように単体として存在するかは、基本ゼロ助詞と、助詞の省略の違いになる。丸山(1995)では、無助詞句は、小さく係るものと、大きく係るものの2種類があると述べている。

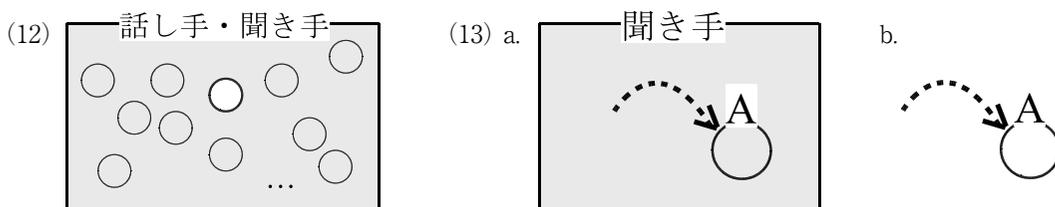
まずは小さく係るものから見る。これは助詞の省略に相当する。小さく係るとは、直後の述語に係ったり、埋め込み句の内部に係ったりするもの言う。小さく係るとき(11b)のように単体として存在し、出現の意味はない。現れる位置も文頭とは限らず、いろいろな場所で現れる。述語に係ることから、省略句の文法的役割が分かりやすくなり、助詞付き表現とほぼ同じ意味を持つ。

丸山(1995)が述べるように、格助詞の無形化は、もっぱらガ格・ヲ格・ニ格で起こる。しかし直後の動詞に係る場合には、ヲ格が多くなる(丸山 1995: 368)。これは係る動詞と一番結びつきが強い格が目的格だからと考えられる。そのため省略句に来やすい傾向にあると言える。しかしそれ以外の格であっても、動詞が近いと、動詞との関係はより分かりやすいものとなる。そのため逆に、動詞との距離が離れたり、文頭に来て主題性を持つようになると、関係が遠いガ格が多く来たり、格自体の認定が難しくなってくる。そこには切り離しが関わっている。助詞の省略の場合、省略句が述語に小さく係るために、関係が分かりやすく、意味もほとんど変わらない。つまり切り離し感が弱い。そのため出現の含意がなくなる傾向にある。

次に大きく係る場合を考える。基本、ゼロ助詞の用法になる。動詞から離れたり、文頭に位置する場合、丸山(1995)では主題性が高くなると述べている。本稿では主題ではなく、切り離しを通して考察する。この大きく係る場合、述語との距離がでるために、切り離し感が強くなると考える。そのため出現の意味合いとなる((11a))。しかし何の脈絡もなく単体として出現すれば、そのまま

では宙に浮いた感じになってしまう。カテゴリーによる紐付けも、助詞による構文内での紐付けもないからである。そのため条件が課せられることとなる。文脈から特定されることが要求される。直前に取り上げられていなくとも、話者・聞き手の双方にとって、意識上身近なものである必要がある。意識上近ければ特定でき、紐付けが容易となり、出現した単体であっても安定する。

イメージとしては(12)になる。話し手・聞き手の意識の領域にある、あるいはうっすらと前景化されているものの中から、一つが強く前景化され、それが(13a)のように聞き手の領域に出現する。出現するのだが、すでに意識に上っているものなので、聞き手はそのまま受け入れる。ただ以降の記述では、聞き手の意識領域は表記せず、(13b)のように単純化した形で表記していく。こうしたことは筒井(1984: 117-8)でも「話者がXについて、それが発話時において話者及び聴者に心理的に近いと感じる時、「Xハ」を含む命題を前提にする程度は高くなり、逆に、遠いと感じる時は、前提の程度は低くなる」と述べており、心理的な近さが関わっていることが分かる。



このとき話し手・聞き手の領域にあるもの、言い換えれば聞き手にとって身近で特定出来るものとは何かになる。具体的には(14)に示すように、一人称・二人称、話者・聞き手に身近な人間、指示詞で示されるもの、話者・聴者の意識にのぼっているものなどがある((14)は筒井(1984: 118-120))。主題と似て、ゼロ助詞句もいわば旧情報の一種になると言える。

(14) a. ぼく(ハ)今何も欲しくない。 b. あなた達(ハ)こんなところで何してんの？

c. お父さん(ハ)遅いね。 d. そのペン(ハ)誰のですか。 e. 今の店(ハ)悪くなかったね。

逆に(15)のように身近とは言えない人物や、総称名の場合、ゼロ助詞は容認性が落ちる。

(15) a. アンドロポフハ[*φ]元 KGB の親玉だよ。 b. 砂糖ハ[*φ]体に悪いらしいね。

(筒井 1984: 119-120)

また藤原(1992)が指摘するように、不特定多数を相手にする場合は、助詞付き表現が基本であるが、(16)のように身近さ、つまり特定の一人に向かったような効果を出すために、無助詞表現が使われることがある。(16)はディスク・ジョッキーを録音したものの一部で、不特定多数を対象とするが、下線部分で無助詞表現が用いられている。無助詞を使うことで、身近なものと感じさせている。

(16) えー、お仕事が終わって、ホッと一息、ピーナッツをおつまみにビールを一杯なんていうところに、あまりうれしくないお話をしてしまいました。ところで、そのピーナッツ、湿ってませんか。…………… (藤原 1992: 137)

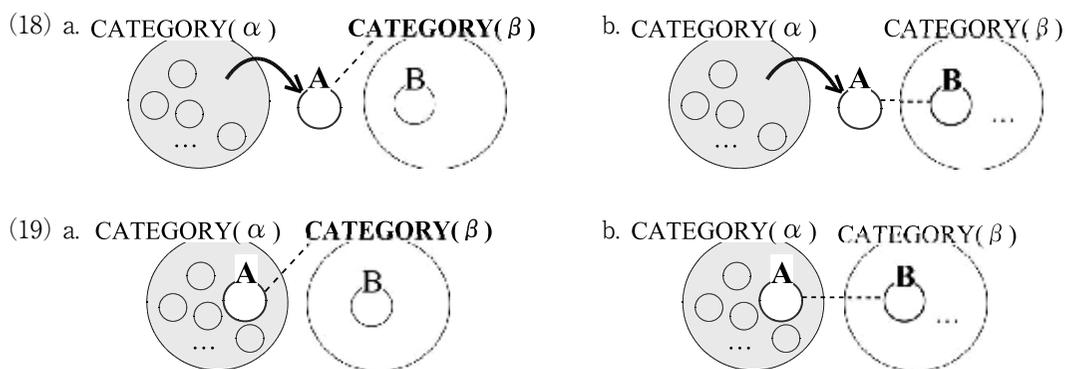
さらに藤原(1992)は、不特定多数を相手にする場合、助詞の省略が起こりにくいのは、相手の領域にできないからだと述べている。「省略した時には相手の領域に踏み込んだ会話、言い換えれば親しみを感じさせるものになっている」とする。助詞省略が、親近感“familiarity”の機能を担って

いるとする。確かに(17b)は駅のアナウンスでは聞くことはないだろう((17)は、藤原(1992: 137))。
 (17) a. 電車がおくれまして大変申し訳ありません。 b. 電車φおくれましてすみません。
 親近感ととるか、形式的ととるかで用語は異なるが、これは(7)Eと基本同じこととなる。

5. 切り離しと直接連結

本節では無助詞句とそれ以外の部分との切り離しについて考察する。このときハヤガと比較する。ハヤガの助詞がある場合、後述部分と直接連結する。助詞があるため、直接的に相互の関係がはっきりしているからである。一方ゼロ助詞や助詞の省略では、助詞がないため、それ以外の部分との切り離し感がある。ここでは両者を比較することで、両者の特性、両者の違いを示していく。

まずハとガを見る。ハとガは、緒方(2021)でカテゴリー分析を行った(以下、ハとガの分析については、スキーマも含め緒方(2021)を参照のこと)。そこではハとガに付加する名詞句(以下ハ/ガ名詞句)は、後述する部分と直接連結されるとした。助詞がつくことで、構文的に一体化しており、互いの関係が明確となっているからである。その関係を連結という形で示した。ここでの連結を通常連結と呼ぶ(破線で表記)。ハ/ガ名詞句と通常連結したものが、言語化される(太字表記)。基本形は、ハ構文が(18)、ガ構文が(19)になる。各々通常連結する相手の違いで、2種類ずつある。一つはAが、カテゴリーラベル(以下ラベル)と通常連結する。(18a)(19a)がそれに当たる。もう一つはAが、カテゴリー(β)の成員と通常連結する。(18b)(19b)がそれに相当する。



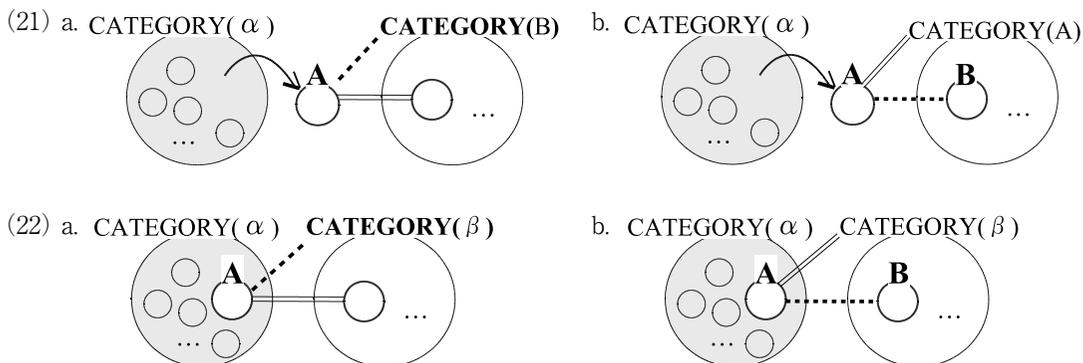
(18)(19)の用例は少ない。関連性のない2つを結びつけるスキーマだからである。とはいえ(18b)の例として、(20)のようなウナギ文がある。(20)ではA(僕/彼/私)が、カテゴリー(注文品/役名/ホテル客室)の成員と通常連結され、言語化される。

(20) a. 僕はウナギだ。(注文品) b. 彼は王様だ。(役名) c. 私は802号室だ。(ホテル客室)

この基本形(18)(19)から、スキーマが派生する。代表的なものが、同一連結が加わるスキーマになる。同一連結では、結びつけられる2つが同一であることを示す(二重線で表記)。同一連結することで2つのカテゴリー間に関連が生まれ、より自然に通常連結がおこる。この同一連結を持つスキーマの方が基本スキーマより用例が多い。代表的な派生スキーマを以下に列挙する。詳細は緒方(2021)に譲るが、大きく2つに分けられる。一つは静的なもの、もう一つは動的なものがある。

まず静的なものは、2つめのカテゴリー(β)が、カテゴリーと成員の包含関係のみになる。(21)

がハのスキーマで、(22)がガのスキーマになる。(21)(22)では通常連結に加え、同一連結がある。通常連結と同一連結では、各々 A は基本別のもの(カテゴリーラベルか成員)と連結する。同一連結が加わっても、ハ / ガ名詞句と通常連結されたもの2つが言語化される(太字表記)。



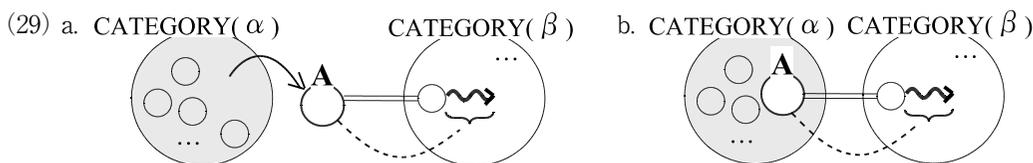
(21a)では A は、カテゴリーラベルと通常連結(破線)し、成員と同一連結(二重線)する。A の一時的属性を示すことが多いが(例(23))、[所属]の用法もある(例(24))。カテゴリー(β : 状態 / 集団)の種類が違っただけで、スキーマは同じになる。一方(21b)で A は、ラベルと同一連結し、成員と通常連結する。(25)のように A の固有属性を示すことが多いが、[典型]の用法もある(例は(26))。

- (23) a. 電車は混んでいた。 b. 彼は酔っ払っていた。 c. 倉庫は散らかっていた。
 (24) a. 彼は、野球部です。 b. 彼は3組です。 c. 彼は福岡県民です。
 (25) a. 彼女は、背が高いです。 b. 彼の目は、黒色です。 c. この物質は、燃えやすい。
 (26) a. 山は富士山。 b. 花は桜。 c. 陶磁器は伊万里だ。

次にガのスキーマ(22a)は(21a)と同様に、A はラベルと通常連結し、成員と同一連結する。一時的属性の意味を持ち、中立叙述を表すことが多い(例は(27))。しかし疑問詞の答としては総記の意味にもなりうる。(22b)は(21b)と同様、A はラベルと同一連結し、成員と通常連結する。代表的用法は、恒常的属性を表し、総記の解釈となる(例は(28))。

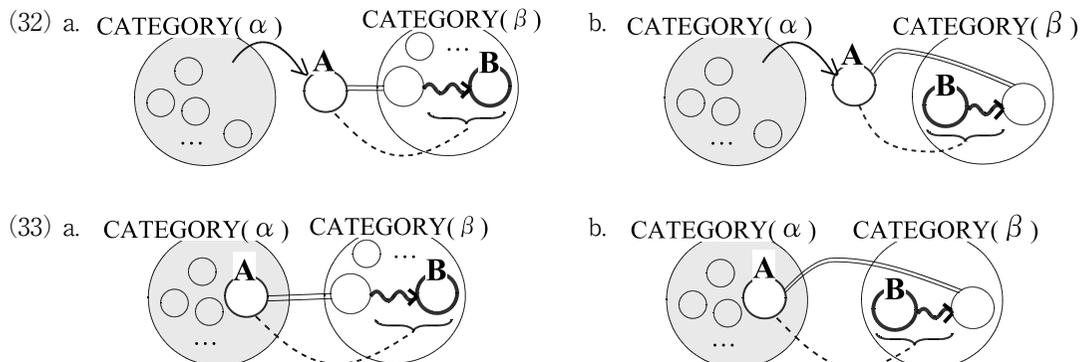
- (27) a. 家が大きい。 b. 庭が広い。 c. 聡子が病気だ。
 (28) a. 何の動物が、首が長いですか。 キリンが首が長いです。
 b. 世界で人口が一番多い国はどこですか。 中華人民共和国が一番人口が多いです。

次に動的な派生スキーマを見る。動的とは、カテゴリー(β)の中に、自動詞構文、他動詞構文のスキーマが現れるものを言う。まず自動詞スキーマが(29)で、(29a)がハのスキーマ、(29b)がガのスキーマになる。(29a)の例が(30)、(29b)の例が(31)になる。



- (30) a. 倉庫は、燃えました。 b. 私は駅まで歩きました。 c. 雨は降りませんでした。
 (31) a. 火事の火が消えた。 b. 花子が泣いた。 c. 雨が降っている。

次に他動詞のスキーマを見る。他動詞では、ハ/ガ名詞句(A)が、主格と同一連結になるものと、目的格と同一連結する場合の2種類がある。(32)がハのスキーマ、(33)がガのスキーマになる。(32a)(33a)ではAが主格と同一連結し、(32b)(33b)ではAが目的格と同一連結している(二重線で表記)。



まずはハの(32)だが、Aがカテゴリーから取り出され主題を表す。(32a)の例が(34)、(32b)の例が(35)になる。なおAが主格、目的格以外の(36)のような例もある。この場合、その他の格助詞とハが併記されることも多い(下線部分)。

(34) a. 彼は、机を買いました。 b. 母は、妹の日記を捨てました。 c. 私は、ピザを食べた。

(35) a. 机は、彼が買いました。 b. 妹の日記は、母が捨てました。 c. ピザは、私が食べた。

(36) a. 大阪には、課長が行く。 b. 薬院までは、特急が速いです。 c. 電車遅延では、3人遅刻です。

次にガの(33)を見る。(33a)には、(37)のように、ガ名詞句(A)が主格と同一連結する適切な文がある。しかし(33b)は、他動性により適格性に違いが生じる。他動性が強い場合、(38)に示すように基本不適格になる。Aが主格と誤認されるからである。しかし他動性が弱い、例えば[可能][動詞+タイ]などであれば、(39)のようにヲの代わりにガが用いることができる(cf. 久野(1973: 50))。

(37) a. 彼がカバンを壊した。 b. 弟がドアを閉めた。 c. 彼が、老人を助けた。

(38) a. *カバンが彼は壊した。 b. *ドアが弟は閉めた。 c. *老人が、彼が助けた。

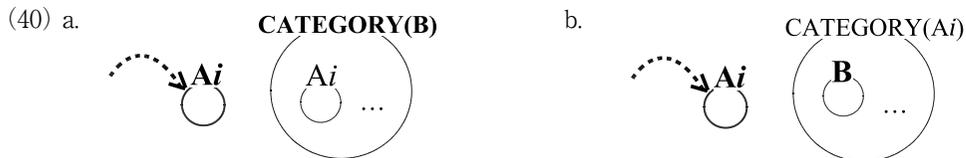
(39) a. 英語が彼は話せる。 b. その映画が私は見たい。 c. お寿司が妹は食べたいそうだ。

上記を踏まえ、まずゼロ助詞のスキーマから見る。ゼロ助詞の場合、後述部分との切り離しが強い。互いの関連が見えにくく、出現という形をとり、切り離し感がでる。2節で見たように、これは呼びかけ表現に通じるものがある。問題はこの切り離しをスキーマにどう反映させるかになる。本稿ではまずハとガで示した通常連結、同一連結がないとする。連結がないことで、切り離されていることを示せる。しかしそれにも関わらず、ゼロ助詞表現全体では、ゼロ助詞句は何らかの役目を担っている。それを何らかの形で、スキーマ上で表す必要がある。

本稿ではそれを、同一指標と太字表記を用いて表記する。同一連結の代わりに、同一指標が似た働きをする。同一指標により、直接的連結はないが、緩やかな形で、カテゴリー(β)内での役割が分かる。無助詞句(A)と、カテゴリー(β)のラベルまたは成員に、同一指標がつけられる。また通常連結と同様に、太字表記を用いる。通常連結されたものはないが、焦点があたり言語化されると

する。つまりゼロ助詞では連結ではなく、単に焦点があたり前景化されると考える。その前景化され、言語化されることを太字で表記する。

まずは静的なスキーマ(40)から見る。助詞がないため、2種類のみになる。これはガとハのスキーマで言うと、通常連結のみの(18)(19)、通常連結と同一連結がある(21)(22)での計8種類に対応する。(40a)ではAと成員が同一指標、最初のAとラベルが前景化され(太字)、この2つが言語化される。(41)に示すようなAの一時的属性を表すことが多い。一方(40b)ではAとラベルが同一指標、Aと成員Bが前景化され(太字)、この2つが言語化される。(42a,b)に示すようにAの固有属性を表すが、眼前のものをさすことが多い。それ以外では、(42c,d)のように不自然になる。



(41) a. 今日の海、穏やかだね。 b. 彼の靴、すごく汚れてるね。 c. 私、熱があるみたい。

(42) a. この腕時計、重い。 b. この象、大きいなあ。 c. ??地球、丸い。 d. ??キリン、首が長い。

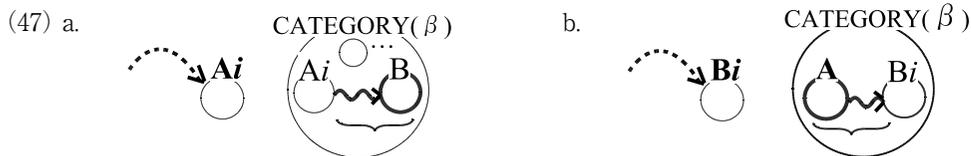
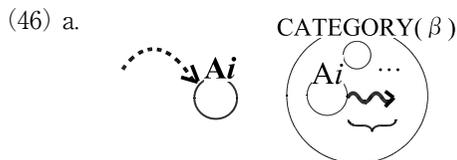
なお基本スキーマ(18b)で見たウナギ文も、(40b)のスキーマで表現することが可能となる。

(43) a. 僕、うなぎ。(注文品) b. 私、お姫様。(役名) c. 彼、二日市駅。(降りる駅)

ただしトートロジーは不適格となる。トートロジーはスキーマ(21b)だが、Aとラベルが言語化される。つまり同一連結されたものが、言語化される変異スキーマになる。しかし対応する無助詞表現(40b)はない。(40b)では必ず成員Bに焦点があたる。ラベルが前景化されるスキーマはない。無助詞では、変異形が認められないと考えられる。(44)に対応する(45)は容認されない。

(44) a. タイはタイ。 b. イチローはイチロー。(45) a. *タイ、タイ。 b. *イチロー、イチロー。

次に動的なスキーマを見る。自動詞が(46)、他動詞が(47)になる。自動詞(46)ではAとカテゴリー(β)内の主語に同一指標が付き、最初のAと動詞部分が太字となる(前景化され言語化される)。(48)のような例がある。一方他動詞の(47a)でもAとカテゴリー(β)内の主語に同一指標が付き、最初のAとカテゴリー内の動詞及び目的語部分が太字となる。例として(49)がある。(47b)では目的語と同一指標が付き、最初のBとカテゴリー内の主語A及び動詞部分が太字となっている。例として(50)がある。



(48) a. 雨、降ってるよ。 b. 彼、泳いでたよ。 c. みんな、笑っていた。

- (49) a. 私、ケーキを食べたよ。 b. 私、玄関の鍵を閉めてくる。 c. 私、先生を呼んできます。
 (50) a. ケーキ、私が食べたよ。 b. 玄関の鍵、私が閉めてくる。 c. 先生、私が呼んできます。

また A が同一指標を結ぶ相手が、主格、目的語以外の場合は容認性が落ちる。例えば二格との同一指標は、(51)に示すように容認性が低い。特にゼロ助詞においては、もっぱら主格・目的格との同一指標にしばられる傾向にある。

- (51) a. ?オリンピック ϕ 、息子が行きます。 b. ?お昼の食事 ϕ 、佐藤が行きました。

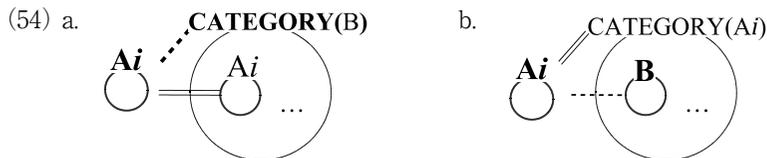
なお同一指標された2つめ(後ろ)は言語化されないことが多いが、表現されることもある。(52)は同一指標の2つが同時に現れている。

- (52) a. 太郎、太郎が来たんです(山田・中川1996: 86) b. それは君、君が言ったことじゃないか。

この切り離しにより、副次的な効果が生じることがある。一つは丁寧表現の効果がある。ゼロ助詞句と後述部分が切り離されているため、直接性が薄まる。間接的であることは、丁寧さにつながるため、効果としてやわらげ表現としての効果が生じる。例として、(53)のようなものがある。

- (53) a. わたくし ϕ 先生をこんなにお恨みしたことはありません。(cf. わたくしは先生を…)
 b. これ ϕ つまらないものですが……。 c. 先生、今日のネクタイ ϕ すばらしいですね。
 d. [電話で]ゆかりさん ϕ いらっしゃいませんか。(藤原 1992: 144-146)

次に助詞の省略の場合、ゼロ助詞とは異なるスキーマになる。確かに助詞がないために、切り離しはあるが、切り離しの度合いが弱く、構文内での位置づけがより透けて見える。まずは静的なスキーマ(54)から見る。(54)は、(21)(22)と(40)に対応する。

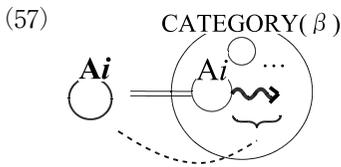


(54ab)どちらも、省略句と、後半部分は連結してはいないが、その軌跡は見える形になっている(連結線は延びているが結びついてはいない)。つまり助詞の省略は、ゼロ助詞と助詞付き用法の間にある。これは4節で述べたように、構造的なものが関係している。

(54a)は、省略句とカテゴリーの成員に同一指標がつき、前の A とラベルが太字になっている。(55)に示すように、一時的属性を表す。ここでは格助詞ガを入れても、ほぼ意味は変わらない。(54b)は、省略句とラベルに同一指標がつき、前の A と成員 B が太字になる。しかし(56)に示すように、容認性は低い。それらしい表現はあるが、切り離し感が強いゼロ助詞の用法になる。

- (55) a. 空、青いね。 b. 天気、いいね。 c. 風、強いね。 d. 雨、降ってきた。
 (56) a. ?象の鼻、長い。 b. ?藤井聡太、強い。(cf. 私、日本人です。この人、背が高い。)

次に動的なスキーマを見る。自動詞が(57)、他動詞が(59)になる。(57)は(29)(46)に対応しており、同様に連結線は延びているが、結びついていない。ただし(54)と同様、省略句と、後半部分は連結してはいないが、その軌跡は見える。切れているため、省略句と主語に同一指標が付いて、前の A と動詞部分が太字になっている。(58)のような例があるが、省略句に格助詞ガを入れたとし

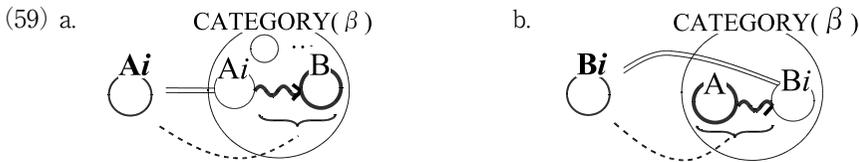


ても、意味はほとんど変わらない。

- (58) a. 雨、降ってました。 b. 聡子、笑っています。
c. 彼、逃げました。

(59)は(32)(33)と(47)に対応している。同様に省略句と、後半部分は連結してはいないが、軌跡は見える。(59a)

では省略句と主語部分に同一指標がつけられ、前の A とカテゴリー(β)内の動詞と目的語が言語化される。言語化されるものは、前景化されており、太字で表記されている。一方(59b)では省略句と目的語に同一指標がつき、前の B とカテゴリー(β)内の A と動詞が言語化されることから、その部分が太線となっている。



ただ(59a)は、(60)に示すように、容認性が低い。あえて言えばゼロ助詞よりになる。

- (60) a. ?彼、新しい本を書きました。 b. ?妹、写真を撮りました。
c. ?あなた、車を運転してました。

一方(59b)は、(61)に示すように適格な例がある。以下省略句(φ付き名詞句)は文中においてあるが、それは先頭に持ってくると、ゼロ助詞句の解釈ができるためである。

- (61) a. 妹が昼にラーメンφ、食べてたよ。 b. あなたがキャッチフレーズφ、考えてきてね。

むしろ目的語のヲ各以外で、助詞の省略がおこることもある。スキーマは多種にわたることから省略するが、(59b)の変異形になる。また無助詞であることから、同一指標以外の要素が省略されることもある。助詞の省略の場合、ゼロ助詞と違い、ある程度周辺的なものも適格となる。

- (62) a. A班は何時から山φ、登るのですか。 b. 食事φ行く店、探しといて。<目的>
c. 特急は井尻駅φ、止まりますか。 d. 子供がディズニーφ、連れて行けと言うんです。

ここまでゼロ助詞と助詞の省略を見てきたが、両者にスキーマ上で共通するのは2つあった。一つはゼロ助詞句と省略句が、カテゴリーではなく、単体として存在していること、もう一つは無助詞以外との部分との切り離しがあることがある。しかしそれ以外は、様々な違いがあり、その違いをスキーマを通して見てきた。それにより、助詞との置き換え可能性、助詞付き表現との意味の相違など、違いが生じてきた。

なお無助詞は、一文の一つとは限らない。(63)のように、複数個の無助詞が共存する場合がある。

- (63) a. あなたφ試合φ勝ったとき、感動したわ。 b. 今日は私φ寿司φ食べたい。

6. まとめ

本稿では無助詞を考察し、そのカテゴリースキーマを提示した。まず無助詞をゼロ助詞と助詞の省略の2つに分けた。そしてハとガのスキーマと比較することで、各々の特徴をあぶりだすとともに、スキーマを示した。まず一つめに無助詞では、無助詞以外の部分との切り離しがあるとした。

切り離されているとはいえ、関係性があるため、同一指標で連関を持つもの同士を結びつけ、さらに前景化される要素を太字表記した。ただゼロ助詞と助詞の省略では、切り離しの度合いが異なることから、スキーマに違いが生じた。次に無助詞句の部分が単体であると述べた。カテゴリーが関与していないことで、ハヤガにある対比や排他の意味がないことを見た。そしてこの切り離しと単体が、無助詞に共通する特性となる。そして無助詞のゼロ助詞と助詞の省略は、呼びかけ表現や助詞付き表現と、線上でつながりがあると述べた。今後、ハ、ガ、無助詞での違いや特性をさらに明らかにしたいと考えている。

注

- *1 先行研究において用語は統一されておらず、苺宿(2014: 148)などに用語の使い分け例がある。
- *2 丹波(2014: 602)では、(1a)を無助詞格、(1b)を無助詞主題と名称において区別しているが、本稿では、まとめて議論することとする。
- *3 この働き機能は、ゼロ助詞だけでなく、助詞の省略においても見られることである。藤原(1992: 141)には、相手への働きが強い発話として命令、依頼、許可、申し出、勧誘などがあげられている。
 - (i) a. 変なものφ食べさせるなよ。 b. この書類φ明日までに仕上げてもらえないでしょうか。
 - c. わたくし、明日有給休暇φ取らせていただいてもいいでしょうか。
 - d. この仕事、わたくしφやります。 e. 一緒にコーヒーφ飲みに行きませんか。(藤原 1992: 141)
 さらには、終助詞の「ね」「よ」類、終助詞的な使い方の「の」「でしよう」「わけ」「から」などで、相手への働きかけを生み出すことができるとしている。
- *4 黒崎(2003)では無助詞には、1. 聞き手の情報を求める文、2. 聞き手への要求を表す文、3. 話し手、聞き手が主題の文、4. 眼前の事象について述べる文、5. 現象描写文の疑問文、6. 特別な表現、7. 新しい話題の新規導入文があるとす。 (4)との対応関係で考えれば、1は(4)5、2は(4)3、7は(4)8に対応している。黒崎(2003)ではさらに細かく分類しているが、ここでは呼びかけ表現と無助詞表現に重なりがあり、連続線上に位置していることを示すことが目的なので、細部の対応関係は見ないこととする。なお黒崎(2003)にはないが、(4)10に相当する(i)の様な例もある。
 - (i) あそこのコーヒーφおいしゅうございましたね。(藤原 1992: 141)

引用文献

- 藤原雅憲(1992)「助詞省略の語用論的分析」田島毓堂、丹羽一彌『現代日本語の研究』和泉書院、pp. 129-148.
- 苺宿紀子(2014)「『無助詞』研究の現状と課題」『学術研究(人文科学・社会科学編)』(62), pp. 147-162.
- 久野暉(1973)『日本文法研究』大修館書店.
- 黒崎佐仁子(2003)「無助詞文の分類と段階性」『早稲田大学日本語教育研究』(2), pp. 77-93.
- 丸山直子(1995)「話しことばにおける無助詞格成分の格」『計量国語学』19(8), pp. 365-380.
- 緒方隆文(2021)「『ハ』と『ガ』のカテゴリー分析」『年報』32, pp. 43-55.
- 尾上圭介(1975)「呼びかけの実現一言表の対他的意志の分類」『国語と国文学』52(12), pp. 68-80.
- 丹羽哲也(2014)「無助詞」日本語文法学会編『日本語文法事典』大修館書店、pp. 602-603.
- 筒井通雄(1984)「『ハ』の省略」『言語』13(5), pp. 112-121.

(おがた たかふみ：英語学科 教授)

